

## 中間言語と誤答分析

## (Interlanguage and Error Analysis)

## —言語習得臨界期の年齢にある日本語話者の英語習得過程—

伊藤 千寿

## 1. はじめに

一般には、外国語学習過程における学習者の誤りは学習事項が定着していないことを示すものとされており、外国語学習の場では修正すべきものとして扱われる。かつて、その「誤り」の原因は母語と目標言語との構造の違いにあると考えられており、外国語教育は二言語を比較・分析する対照分析 (Contrastive Analysis) に基づいて行われなければならないとされていた (垣田 et al., 1983)。つまり、学習者にとって困難な事項とは、目標言語と母語との文法構造が異なる部分なのであり、外国語指導者は母語と目標言語とを比較・分析し、それをもとにした指導を行わなくてはならない (Lado 1976) という考え方が主流だったのである。

「誤り」についてのこのような捉え方を転換させたのが Corder (1967) である。Corder は言語学習者の「誤り」を、言い間違いなどのような規則性のない運用上の誤り (mistakes) と、規則的に体系として現れる誤り (errors) とに区別し、errors を学習に失敗した部分と捉えるのではなく、学習者が言語を習得していくための学習方略として捉えるべきであるとの考えを述べている。つまり、errors は言語学習者にとって必ず通らなければならない過程だということである。

Corder(1971)は errors を、目標言語の習得途上にある学習者が一時的に持っている言語規則であると捉え、そのような過渡的な体系を持つ学習者言語に Selinker(1969)の Interlanguage という用語を与えている (日本語では「中間言語」という訳語が与えられている)。そして、同じ母語と同じ言語学習経験を持つ学習者が類似した Interlanguage を持つという前提のもとに、誤答分析 (Error Analysis) を通して Interlanguage の構造を明らかにしていくことによって、第二言語習得の指導に見通しを与えることができるとの考えを示している。

上述の Corder (1971) の考え方をとれば、同じ日本語を母語とし、同じ英語を学習する日本の中学生も、共通の Interlanguage を持っていることになる。また、日本人の多くは中学校で正式に英語を学び始めるという点で、学習開始年齢もほぼ一致している。なお、この英語学習開始年齢は、人間の言語習得の臨界期にあたると言われている時期であり、本研究は、この臨界期と言われる年齢にある日本人中学生の Interlanguage を分析し、考察を行っていくものである。その前段階と

して本稿では、Interlanguage とはどのようなものか、Error Analysis とはどのような行われるものか、また、日本の中学校での英語学習がどのような条件下で行われているのかということについて、先行研究を参照しながら論じていく。

## 2. Interlanguage

目標言語の発達途上に現れる学習者言語としての Interlanguage は、絶えず変化しながら母語話者レベルの構造に近づいていくという、過渡的な構造を持つ言語である。実は Interlanguage にはこれ以外の呼称も与えられており、さまざまな視点から捉えられ、論じられてきている。その中で、個人に特有の構造を持つという面に着目した Corder(1971)と、目標言語の構造に近づく途上にあるという面に着目した Nemser(1971)の論を検討し、Interlanguage をもう少し広い枠組みの中で捉えてみたい。

### 2.1 Idiosyncratic Dialect としての Interlanguage

Corder(1971)の定義によると、文法 (grammar) とは、規則的に体系として現れる記述可能な規則のまとまりである。そして、母語話者のものであろうと第二言語学習者のものであろうと、コミュニケーションを目的とした発話には文法が存在するのだという。文法規則をある程度共有している二つの言語は方言 (dialects) の関係にあり、そのような「方言」のうち、どの社会の言語習慣にも属さないような話し手独自の規則を持つものに、Corder は個人的特有方言 (Idiosyncratic Dialect) という呼称を与えている。

Idiosyncratic Dialect には4つのタイプがあり、その一つ目は詩的方言 (poetic dialect) である。これは、文学的な効果を狙ってわざと標準から逸脱した表現を行っているものであり、その解釈は標準的な文法を手がかりとして行われる。つまり poetic dialect は、基本的にはその社会の標準的な言語構造に従いながら、逸脱部分に文学者独自の文法規則が現れる Idiosyncratic Dialect なのである。

二つ目は病理学的逸脱 (pathological deviant) であり、いわゆる失語症患者の発話である。これは、以前は正常な言語使用をしていた人が事故や病気のために正常な言語使用ができなくなってしまったものであり、本人以外の者には意味が理解できないような逸脱構造を持つ Idiosyncratic Dialect である。

三つ目は母語習得過程にある子供の言語である。言葉を覚え始めたばかりの子供の発話は、大人が聞いても理解できない部分を持っており、その部分に子供独自の文法規則が現れていると言える。ただし子供の言語は不安定ではあるが標準的な構造への発達過程にあり、標準から逸脱しているというよりはむしろ、習得

途上の言語であると考えべきものである。

四つ目が言語学習者の言語であり、Interlanguage と呼ばれているものである。これも母語習得過程の子供の言語と同じように、不安定な習得途上の言語であり、言語学習者独自の文法規則を持っている Idiosyncratic Dialect である。この学習者独自の文法が errors として Interlanguage の中に現れ、それは学習者の言語習得の程度を表す指標ともなっている。

## 2.2 Approximative System としての Interlanguage

Nemser(1971)は、発達途上の学習者言語に Approximative System という用語を与え、次の3つを前提として述べている。

1. ある学習段階における学習者の発話は、母語とも目標言語とも異なる内的な構造を持っており、それが言語システムの形をとって現れている。
2. Approximative System には連続した段階がある。学習者が初めてその言語を使おうとする時の Approximative System が最も初期の構造を持っており、最も進歩した Approximative System が最も目標言語に近い構造になっている。
3. 同じ段階にある言語学習者の Approximative System は、だいたい同じような特徴をもっている。差異が現れる部分は個々の学習経験の違いが原因となっているものである。

ところで Nemser(1971)は、Approximative System という用語を学習者言語に限定して使っていない。世界には、移民言語 (immigrant speech) のように Approximative System がそのまま社会集団の中に定着して使われているものや、インド英語のように Approximative System がその国の社会的標準として公用語となっているものなどが数多く存在し、Approximative System を使うグループの中では言語学習者は少数派であるという。また Richards(1972)も、Interlanguage に見られるような段階が習得の最終地点となっている例として、英語が土着の言語と接触して生まれた地域方言についての言及を行っているが、これも Approximative System の一つと考えて良い。従って Approximative System については、その構造が最終段階であるものと、発達途上であるものとの2種類があると捉えるのが妥当であり、Interlanguage は後者を指すものである。

## 3. Error Analysis

Interlanguage の構造を記述・分析するための研究手法として Corder(1971)によつ

て導入されたのが、誤答分析(Error Analysis)である。Error Analysis によって、学習者の errors には母語からの影響とは考えられないようなものが多く見られるということが明らかになると、それまでの対照分析の考え方に対して、errors の原因をより広い視野から捉えようとする試みが行なわれるようになった。

Error Analysis の手順については、Corder(1971)が

1. 個人的特有表現の認識(recognition of idiosyncrasy)
2. 記述(description)
3. 説明(explanation)

の3つの段階を踏んで行われるものであるとしている。また、Dulay et al. (1982) は、errors は複数の原因によって生じることもあるのだから、その分類は目に見える部分に従って行なわれるべきであり、記述(description)と説明(explanation)とを混同すべきではないという考えを示している。これらの方針に従って、本研究の Error Analysis においても、記述・分類の段階と原因説明の段階とを区別して取り組んでいくこととする。

### 3.1 errors の分類方法

errors の分類には、どこに視点を置くかによって何通りかの方法が考えられる。Dulay et al. (1982) は errors の分類方法として、言語学的範疇 (linguistic category) による分類、表面に現れた方略 (surface strategy) による分類、比較分析 (comparative analysis) による分類、コミュニケーションに与える影響 (communicative effect) による分類の4通りを挙げている。

linguistic category による分類では、言語学的範疇による項目を立てて分類を行う。例えば Politzer and Ramirez(1973)は、errors を形態素に関わるものと統語上のものとに大別し、さらに形態素の下位項目を不定冠詞、所有格、三人称単数形、過去形、過去分詞、比較表現とし、統語の下位項目を名詞句、動詞句、動詞 and 動詞、語順、変形とした。また、過去形については規則動詞と不規則動詞に分けるなど、必要に応じてさらに細かい下位項目も立てている。別の例としては、上位項目を節、助動詞、受動態、接続詞、文補語、心理的述部とした Burt and Kiparsky(1972)の分類方法がある。

surface strategy による分類では、表面に現れた構造によって分類を行う。Dulay et al. (1982) がその分類項目としているのは、以下の4つである。

- ① 脱落(omission)－必要な形態素や語を省いてしまう
- ② 付加(addition)－余分な形態素や語をつけてしまう
- ③ 形式の誤り(misformation)－形態素や語の形が誤っている
- ④ 配列の誤り(misordering)－語の位置や語順が誤っている

これは見た目でそのまま分類を行うことのできる最もシンプルな方法であり、記述の第一段階として使うのにはちょうど良い。

comparative analysis による分類では、その errors が他のどの言語構造と比較されるべきかによって分類を行う。この場合の Dulay et al.(1982)による分類項目は以下の通りである。

- ① developmental errors  
－その言語を母語として習得する場合と比較すべき errors
- ② interlingual errors  
－学習者の母語の構造と比較すべき errors
- ③ ambiguous errors  
－どちらにも当てはまりそうな errors
- ④ other errors  
－どちらにも当てはまりそうにないが第二言語学習者に特有のものとして現れている errors

この分類方法は errors の原因にも関わるものであるが、原因の特定できない errors であっても曖昧な状態のまま分類できるような項目の立て方になっており、その点で errors の記述と説明とを混同しないという原則は保たれている。

communicative effect による分類では、コミュニケーションに与える支障の程度によって分類を行う。Dulay et al. (1982) によるこの場合の分類項目は以下の通りである。

- ① global errors 一文構造全体に影響を与えてコミュニケーションに大きな支障を与えるものであり、効果的にコミュニケーションをとる能力の指標となる
- ② local errors 一文の一部に影響を与えるがコミュニケーションに大きな支障は与えないものであり、文法的に話す能力の指標となる

どの分類方法が最も妥当であるかは、研究の目的や内容によっても異なる。実際に研究を行う時は、その目的や内容に応じて適切な分類方法を選択したり、いくつかの分類方法を組み合わせたりすると良い。例えば、linguistic category による分類項目の中から一つを選んでそれに関する errors のみをデータとして収集し、surface strategy や comparative analysis を組み合わせると分類を行うというのも考えられる一つの方法である。

### 3.2 原因の説明

Error Analysis の最終目的は errors の原因を説明することである(Corder,1971)。errors の原因については、垣田 et al. (1983)によって以下のようにきれいに分類されており、これをそのまま説明のための基本的な枠組みとしたい。

- (1)母国語干渉による誤り(L1-interference error)
- (2)母国語干渉以外の誤り(L1-independent error)
  - ① 言語内の誤り(intralingual error)
    - ある言語規則を他の部分にまで当てはめようとしたことが原因で起こる
  - ② 発達上の誤り(developmental error)
    - 母語として習得される場合と同じ過程によって起こる
  - ③ 誘発された誤り(induced error)
    - 指導法や指導教材が原因となって起こる
  - ④ 伝達方略(communication strategy)に基づく誤り
    - コミュニケーションのために用いるさまざまな方略が原因となって起こる
  - ⑤ 学習方略(learning strategy)による誤り
    - 学習者のとる学習方略が原因となって起こる

垣田 et al. (1983)はさらに、「各々の誤りはこれらのカテゴリーの1つのみに起因するというよりは、これらのうちの幾つかが複雑に絡み合って生じる」とも述べており、ある一つの error が複数の原因カテゴリーに当てはまる可能性を示唆している。また実際の分析の中で、ここに挙げられた以外の原因による errors や原因不明の errors が出てくる可能性についても考えておかなければならない。従って実際に errors を分類カテゴリーに当てはめていく時には、Dulay et al.(1982)が comparative analysis による分類で用いていた ambiguous errors と other errors を上の

原因カテゴリー項目に付け加えた上で、原因分析を行なっていくことにしたい。

### 3.3 言語習得過程

Nemser(1971)が *Approximative System* について述べていたように、*Interlanguage* には連続した段階がある。よって各段階の *Interlanguage* に現れる errors を言語習得段階に従って並べたものは、その学習者の言語習得過程を表していることになる。これについては、特定の文法事項の習得過程に関する研究がすでにいくつか行われており、興味深いデータが得られている。

Ravem (1970) はノルウェー語を母語とする子供を対象とした研究により、時制表示としての“do”が次の4つの段階をたどって習得されるということを確認している。

- Time 1 “not”の変形として“don't”が用いられる段階
- Time 2 “you”の変形として“do you”が/dju:/という発音によって用いられる段階
- Time 3 時制を示す形態素としての do を獲得する途中にあり安定を欠いている段階
- Time 4 現在形でも過去形でも“do”が独立して現れる段階

また、Dulay et al.(1982)によると、英語の否定文の習得までに母語話者も第二言語学習者も共通にたどる過程として、次の3つの段階があるという。

- Step 1 主語は現れず中心となる語に no や not をつけるのみ
- Step 2 主語が現れ、否定助動詞に no, not, don't を使用
- Step 3 時制と否定辞を伴った助動詞を用いるようになる

その他の言語項目についても *Error Analysis* を通して、その習得過程を明らかにすることができるはずである。その中には母語話者と同じ習得過程が見られる部分もあれば、言語学習者に特有の過程が見られる部分もあることだろう。日本語を母語とする学習者であれば、日本語からの影響が共通に現れる可能性もある。また、調査データが話し言葉か書き言葉かによっても、あるいは研究対象となる学習者の年齢によってもそれぞれに異なった特徴が現れると考えられる。いずれにしても学習者の言語習得過程が明らかになれば、言語学習指導のための地図が手に入ることになり、それによって Dulay et al.(1982)も述べているように、学習者

が新しい言語体系をどの程度習得しているかを知る手がかりが得られるのである。この点が言語学習指導において Error Analysis が最も貢献しうる部分であると言える。

#### 4. 日本での英語学習の背景

では現在、日本人はどのような背景のもとに英語学習を行っているのだろうか。中学校入学以前から塾や学習教材、その他の機会に英語を学んでいる日本人は数多いが、やはり大多数の日本人は中学入学以降に正式に英語を学び始める。ここでは、その英語学習開始時の年齢や、学校での英語学習という環境が、日本人の英語学習をどのように条件付けているのかということについて考えてみたい。

##### 4.1 言語習得の臨界期

Johnson and Newport (1989)は、言語の十分な発達のためには思春期に入る前に言語習得が行われなくてはならないとする Lenneberg(1967)の臨界期仮説(the critical period hypothesis)について、これが第二言語習得にも適用できるかどうかを確かめるための研究を行い、年齢と言語習得能力との関係を明らかにしている。これは、アメリカに移住してきた中国語及び韓国語の話者を対象に、移住時の年齢と英文法運用能力との関係について調査を行ったものであり、そのデータは、第二言語習得能力は7歳をピークとしてその後思春期にかけて徐々に下降して行くこと、そして思春期以降は年齢と言語習得能力との相関関係が見られなくなることを示している。ただし思春期以降の移住であっても、自国での英語学習開始年齢や学習年数が移住後の習得レベルに弱いながらも影響を与えるということを示すデータも得られている。

この研究結果をもとにすると、日本人の大多数にとっての英語学習開始年齢である12～13歳は第二言語習得能力が最盛期を過ぎてかなり下降してしまっている時期ではあるが、まだ大人よりは少しは有利に言語学習ができる状態にあり、そのような意味では確かに言語習得の臨界期に当たるのだろう。ただし日本では、学校外で英語を使わなければならない場合はほとんど存在しないため、英語社会の中にいる場合と同じレベルの英語運用能力を獲得するのはかなり難しい。それでも、自国での学習開始年齢や学習年数が思春期以降の英文法運用能力にある程度の影響を与えることは Johnson and Newport (1989)の研究からも明らかであり、中学での英語学習が将来の英語習得に有利に働く面があるのは確かであると考えられる。



## 4.2 日本の英語学習環境

Richards(1972)によると、英語を第二言語として学ぶ場合と外国語として学ぶ場合とは、学習の性質や目的は異なったものになる。英語がコミュニケーションの手段としての役割を持っていない社会では、英語は「外国語」として純粋に文化的な学習対象、あるいは教科の一つとして扱われる。そして、英語学習を通して英語圏の人々の生活について学ぶことも学習目的の一つとされる。

では日本での英語学習はどうかと言えば、英語を使わなければならないのはほとんど授業中のみである。学校外にも英語を学習する場や英語を使えたほうが便利な場はあるとしても、英語が使えないために日常生活が成り立たなくなる状態というものはないのである。また、日本の学校では英語そのものを学習するだけでなく、英語学習を通して外国の生活や文化に触れることをも意図してカリキュラムが組まれている。こうして見ると、日本の英語学習は、環境としても内容としても Richards(1972)の述べている「外国語としての学習」そのものである。ただし最近の英語教育に対する考え方には、「第二言語としての英語」を志向していると思われるものも多い。

## 5. おわりに

本稿は、これから実際に Error Analysis を行っていくための予備研究のまとめであり、Interlanguage と Error Analysis 及び日本人の英語学習者の状況について、理論的な位置付けを与えるものである。Interlanguage が発達途上の学習者言語であり、その構造を明らかにするための手法として Error Analysis が用いられること、また、それを通して言語学習者の言語習得過程を知ることができること、そして大多数の日本人英語学習者が言語習得の臨界期と言われる時期に外国語としての英語を学んでいることを、ここでもう一度確認しておく。

本研究で Error Analysis の対象とするのは、日本人中学生の書き言葉による英語の Interlanguage である。書き言葉は、辞書や教科書を参考にしながら時間をかけて文を作ったり、一度書いた文を訂正したりすることが可能であることから、話し言葉のような全く自然な状態にあるものではない。しかし、書き言葉による英語も英語運用能力の一部を成すものであり、実際には日本人中学生の多くは実践的な英語については、話す機会よりも手紙やインターネットなどで書く機会の方が多いのである。また、書くために必要な英語運用能力は、話すためにも必要なものであり、その学習者のコミュニケーション能力全般に関わっているのである。

今回は、その英語運用能力の中でも、特に平叙文と疑問文の構造及び動詞の使い方

日本人学習者の英語習得過程の一部が明らかになれば、学習者の英語習得段階を把握する手がかりの一つが得られることになり、さらにその後の指導の見通しにもつながっていくことが期待できるのである。

### 参考文献

- Brown, H. D. and Gonzo, S. T. (ed.). (1995). *Readings on Second Language Acquisition*. Prentice Hall Regents.
- Corder, S. P. (1967). The Significance of Learners' Errors. *Error Analysis: Perspectives on Second Language Acquisition*, 19-30.
- Corder, S. P. (1971). Idiosyncratic Dialects and Error Analysis. *Error Analysis: Perspectives on Second Language Acquisition*, 158-171.
- Dulay, H. C. and Burt, M. K. (1974). You can't Learn Without Goofing: An Analysis of Children's Second Language 'Errors'. *Error Analysis: Perspectives on Second Language Acquisition*, 95-123.
- Dulay, H. et al. (1982). *Language Two*. Oxford University Press, Inc.
- Johnson, J. S. and Newport, E. L. (1989). Critical Period Effects in Second Language Learning: The Influence of Maturational State on the Acquisition of English as a Second Language. In Brown, H. D. and Gonzo, S. T. (ed.). *Readings on Second Language Acquisition*, 75-115.
- 垣田直巳 et al. (1983) 『英語の誤答分析』大修館書店。
- 鎌田修 (1995) 「語学教育における中間言語」『言語』Vol.24, No.2. 大修館書店。
- Lado, R. (1976). *Language Teaching: A Scientific Approach*. Tata McGraw-Hill Publishing Company Limited.
- Nemser, W. (1971). Approximative Systems of Foreign Language Learners. In Richards (ed.), *Error Analysis: Perspectives on Second Language Acquisition*, 55-63.
- Ravem, R. (1968). Language Acquisition in a Second Language Environment. In Richards (ed.), *Error Analysis: Perspectives on Second Language Acquisition*, 124-133.
- Ravem, R. (1970). The Development of Wh-Questions in First and Second Language Learners. In Richards (ed.), *Error Analysis: Perspectives on Second Language Acquisition*, 134-155.
- Richards, J. C. (1971). A Non-Contrastive Approach to Error Analysis. In Richards (ed.), *Error Analysis: Perspectives on Second Language Acquisition*, 172-188.
- Richards, J. C. (1972). Social Factors, Interlanguage, and Language Learning. In Richards (ed.), *Error Analysis: Perspectives on Second Language Acquisition*, 64-91.

- Richards, J. C. (ed.). (1977). *Error Analysis: Perspectives on Second Language Acquisition* (3<sup>rd</sup> ed.). Longman Group Limited.
- Richards, J. C., and Sampson, G. P. (1974). The Study of Learner English. In Richards (ed.), *Error Analysis: Perspectives on Second Language Acquisition*, 3-18.
- Selinker, L. (1972). Interlanguage. In Richards (ed.), *Error Analysis: Perspectives on Second Language Acquisition*, 31-54.

(岩手大学大学院教育学研究科教科教育専攻英語教育専修)